

赤いカブトムシ

江戸川乱歩

青空文庫

あるにちよう日のごご、丹下サト子ちゃんたんげと、木村ミドリちゃんきむらと、野崎サユリちゃんのせきの三人が、友だちのところへあそびに行ったかえりに、世田谷区せたがやのさびしい町を、手をつないで歩いていました。三人とも、小学校三年生のなかよしです。

「あらっ。」

サト子ちゃんが、なにを見たのか、ぎよつとしたようにたちどまりました。

ミドリちゃんもサユリちゃんもびつくりして、サト子ちゃんの見つめている方をながめました。

すると、道のまん中に、みょうなことがおこっていたのです。むこうのマンホールをつのふたが、じりり、じりりと、もち上がっているのです。だれか、マンホールの中にいるのでしょうか。

マンホールのふたは、すっかりひらいていました。そして、その下から、黒いマントをきた男の人が、ぬうつとあらわれたのです。その人は、つばのひろい、まっ黒なぼうしを

かぶり、大きなめがねをかけ、口ひげがぴんと、両方にはね上がっていて、黒い三かくのあごひげをはやしていました。

せいようあくまみたいな、きみのわるい人です。その人は、マンホールからはい出して、じめんにすつくとたち上がると、三人の方を見て、にやりとわらいました。そして、黒いマントを、こうもりのようにひらひらさせながら、むこうの方へ歩いていくのです。

「あやしい人だわ。ねえ、みんなで、あの人のあとをつけてみましょうよ。」

ミドリちゃんが、小さい声でいきました。ミドリちゃんのにいさんの敏夫としおくんは、しゅうねんたんでいだんいんなので、ミドリちゃんもそういうたんでいみたいなのがすきなのです。サト子ちゃんもサユリちゃんも、ミドリちゃんのこととは、なんでもきくくせなので、そのまま三人で、黒マントの男のあとをつけていきました。

黒マントは、ひろいはらっぱをとおって、むこうの森の中へはいつていきます。世田谷区のはずれには、はたけもあれば、森もあるのです。ひるまですから、もりへはいるのも、おそろしくはありません。三人は、こわいもの見たさで、どこまでもあとをつけました。

森の中に、一けんのふるいせいようかんがたっていました。

「あらっ、あれはおばけやしきよ。」

「まあ、こわい。どうしましょう。」

そのせいようかんは、むかし、せいよう人がすんでいたのですが、いまはあきやになつていて、そのへんではおぼけやしきとよばれています。

三人は、近くにすんでいるので、それをよく知っていました。

夜、せいようかんの二かいのまどから、赤い人だまが、すうつと出ていったのを見た人があるということでした。また、だれもないせいようかんの中から、きみのわるい女のなき声がきこえてくるというわさもありました。

三人のしようじよがにげ出そうとしていますと、あつとおどろくようなことがおこりました。

黒マントの男が、せいようかんの外がわを、するするとのぼっていくではありませんか。はしごもないのに、まるでへびのようにのぼっていくと、二かいのまどの中にすがたをけしてしまいました。

三人はぞつとして、いきなりかけ出そうとしましたが、そのとき、せいようかんの方から、けたたましいさけび声がきこえてきました。

それをきくと、三人とも、思わず、うしろをふりむきました。二かいのまどから、白い

かおがのぞいていました。そのかおが、きやあつとさけんでいるのです。とおいので、はつきり、わかりませんが、三人とおなじくらいの子供の年ごろの、おかつぱの女の子です。その子が、いまにもころされそうにさけんでいるのです。

「きつと、あの黒マントの男がいじめているんだわ。」

三人とも、おなじことを考えました。

まどの女の子は、なにもものかの手からのがれようとして、もがいていましたが、とうとう、ずるずるとうしろへひっぱられて、まどからきえてしまいました。そのとき、なき声がぱったりとまったのは、男に口をおさえられたからかもしれません。

三人は、むがむちゆうでかけ出しました。そして、近くのめいめいのうちへかえったのですが、ミドリちゃんは、すぐにこのことをおとうさんと、にいさんの敏夫くん知らせました。

「おいしいことをしたなあ。ぼくがそこにいれば、きつと手がかりをつかんだのに。」
しょうねんたんでいだんいんの敏夫くんが、ざんねんそうにいました。

ミドリちゃんのおとうさんが、けいさつにでんわをかけたので、けいかんたちが森の中のせいようかんにかけつけて、中をしらべましたが、まったくのあきやで、人のかげさえ

見えないのでした。せいようあくまのような黒マントの男は、いったいなにものでしょうか。そして、あのかわいそうな女の子は、どうなったのでしょうか。

2

森の中の、ふるいせいようかんのまどから、小さい女の子が、たすけをもとめてなきさけんでいた、そのあくる日のこと。

ミドリちゃんのにいさんの木村敏夫くんは、さつそく、このことをしようねんたんでいだんちようの小林^{こばやし}くん^{こばやし}に知らせましたので、小林だんちようが、木村くんのうちへやつてきました。

そして、ふたりで森の中のせいようかんをたんけんすることになりました。まっぴるまですから、こわいことはありません。でも、ふたりとも、たんでい七つどうぐのかいちゆうでんとうや、きぬ糸のなわばしごや、よぶこのふえなどは、ちゃんとよういしていません。

小林だんちようと木村くんは、うすぐらい森の中をとおって、おばけやしきのせいよう

かんのまえに来ました。入口のドアをおしてみますと、なんなくひらきました。かぎもかかっていないのです。ふたりは中へはいり、ひろいろうかを、足音をたてないようにしてしのびこんでいきました。

かいちゆうでんとうをてらし、長いあいだかかって、一かいと二かいのぜんぶのへやをしらべましたが、だれもいないことがわかりました。まったくのあきやです。

「どうも、このへやがあやしいよ。なぜだかわからないが、そんな気がするんだ。」

一かいのひろいへやにもどつたとき、小林くんが、ひとりごとのようにいいました。すると、ちょうどそのとき……。

どこからともなく、かすかに、かすかに、

「おじさん、かんにんして。あつ、こわいつ……たすけてえ……。」

というひめいがきこえてきました。小さい女の子の声のようです。

ふたりはぞつとして、たちすくんだまま、かおを見あわせました。

「ゆか下からきこえてきたようだね。」

小林くんが、くびをかしげながらいました。するとまた、

「あれっ、いけないっ。早くたすけて。」と、かすかな声が……。

「どこかに、かくし戸があるにちがいない。どこだろう。」

小林くんは、かいちゆうでんとうをてらして、へやじゆうをさがしまわりました。

そのへやには、大きなだんろがついていて、そのだんろの下がわに、まるいぼっちが、ずつとならんでいます。かざりのちようこくです。小林くんは、そのぼっちを一つ一つ、ゆびでおしてみました。すると、右から七ばんめのぼっちが、ちようどベルのおしボタンのように、うごくことがわかったのです。小林くんは、それをぐつとおしてみました。すると……。

ガタンという音といっしょに、「あつ。」というさけび声。びっくりしてふりむくと、いままでそこにいた木村くんのすがたが、きえうせていました。

小林くんはびっくりして、そこへかけつけました。すると、ゆかいたに、四かくいあながぼっかりとあいていることがわかりました。ちかしつへのおとしあなです。小林くんが、だんろのぼっちをおしたので、それがひらいたのです。

「木村くん、だいじようぶか。」

あなの中へ、かいちゆうでんとうをむけてよんでみました。

「う、う、う……だ、だいじようぶだつ。」

木村くんがくるしそうにこたえました。見ると、あなの下に、すべりだいのようないたが、ずつとつづいています。小林くんは、思いきってそこへとびおりました。

すうっ……とすべりました。そして、どしんと、ちかしつのかたいゆかに、しりもちをつきました。

やつのことでおき上がった、かいちゅうでんとうをてらしてみますと、そこは十じょうほどの、ひろいちかしつでした。しかし、ひめいをあげた女の子のすがたは、どこにも見えません。むこうのかべに、まつくらなほらあながあいています。そのむこうに、べつなちかしつがあるのでしょいか。

「あつ、きみ。あれ、なんだろう。」

木村くんが、おびえた声で、そのほらあなをゆびさしました。

ふたりのかいちゅうでんとうが、ぱつと、そこをてらしました。

まつくらなほらあなのおくで、ぎらぎら光った、二つのまるいものが、ちゅうにういてるのです。そしてそれが、だんだんこちらへ近づいてくるではありませんか。

かいぶつの目です。なにかしらおそろしいものが、こちらへやってくるのです。まるでヤドカリが、かいがらの中からかおを出すように、それが、にゅつとくびを出しました。

「あつ。」

ふたりは、思わず声をたてて、おたがいのからだをだきあいました。

そのからだは、まっかでした。まっかな長い、大きなつの。そのねもとに、ぶきみなどんがった口。二つのぎらぎら光る目。おれまがった六本の長い足……。それは、にんげんほどの大きさの、まっかなカブトムシだったのです。

ああ、ふたりはどうなるのでしょうか。

さつき、ひめいをあげたかわいそうな女の子は、いったいどうしたのでしょうか。

3

小林さんと、だんいんの木村くんが、おぼけやしきのせいようかんのちかしつで、にんげんほどもある、大きなまっかなカブトムシに出あいました。

ふたりは、ちかしつのすみで、そのおそろしいかいぶつを見つめていました。かいぶつをてらしている二つのかいちゆうでんとうのわが、ぶるぶるふるふるえています。

キーツ、キーツと、なんともいえないすごい音がしました。大きなカブトムシのなき

声です。そのたびに、あのとんがった口が、ぱくぱくひらくのです。

大きなカブトムシは、長い六本の足を、きみわるく、がくん、がくんとうごかしながら、ちかしつの中をぐるぐると歩きまわりました。

しばらく歩きまわったあとで、いよいよこちらに近づいてきました。カブトムシのせなかは、まっかにてらてらと光っています。ときどき、大きなはねをひらいて、ぶるんとはばたきのようなことをします。そのたびにおそろしい風がおこるのです。もう、二メートルほどに近づいてきました。とび出した大きな目が、ぎよろりと、ふたりをにらんでいます。

いまにもとびかかってくるかと、ふたりは思わずみがまえました。カブトムシは、あと足をまげ、中の足とおしりでちようしをとって、ぐうつとたち上がり、まえ足をもがもがやっています。きみわるいおなかが、すぐ目のまえに見えました。あのまえ足でつかみかかってくるにちがいないと、いよいよみをかたくしていますと……。

ああ、そのとき、じつにおどろくべきことがおこりました。カブトムシのおなかの中に、ぽかんと、四かくいあながあいたのです。四かくいふたのようなものが、下の方へひらいて、そのふたが、すべりだいのように、ゆかにとどいたのです。すると、おなかの中から、

なにかもごもごと、うごめき出してきたではありませんか。

おなかの四かくいあなからはい出してきたのは、長さ五十センチぐらいの、まっかなカブトムシでした。大カブトムシのはらから、中カブトムシが出てきたのです。まさか、子どもを生んだわけではないでしょう。大カブトムシは、プラスチックかなにかでできている作りものかもしれない。そのはらから出てきた中カブトムシも、五十センチもあるのですから、きつと作りものなのでしょう。

中カブトムシは、ゆかにたれたふたのすべりだいはいおりて、そのへんをぐるぐると歩きまわりました。

大カブトムシのほうは、そのまま、ごろんとあおむけにひっくりかえって、まるでがいのようにじつとしています。

大きなセミのぬげがらみたいです。

中カブトムシは、ちかしつをぐるぐるまわったあとで、ふたりのまえへ来ると、ぐうつとたち上がりました。大カブトムシとおなじことをするのです。また、おなかに、ぽかんとあながあきました。そして、そこから、こんどは十五センチぐらいの、かわいいカブトムシがはい出してきました。

かわいいといっても、十五センチですから、ほんとうのカブトムシのなんばいもある、からだじゅうまっかなおぼけカブトムシです。中カブトムシのほうは、また、セミのぬけがらのように、ごろんところがっています。

十五センチの小カブトムシは、ちよちよことそのへんをはいまわっていました、やがて、ふたりのまえに来ると、またしてもあと足でひよいとたち上がりました。

そして、おなじことをくりかえしたのです。十五センチのカブトムシのおなかに、四センチほどの四かくいあながあいて、そこから、こんどは、ほんものとおなじくらいの大きさのまっかなカブトムシが、ゆかの上にすべり出しました。

ところが、この小さいカブトムシは、十五センチのカブトムシがぬけがらになってころがってしまった、すこしもうごかないのです。

ゆかにおちたまま、じっとしています。これは、しんでいるのでしょうか。

それにしても、なんてかわいらしく、うつくしいカブトムシなのでしょう。いままでの大カブトムシとちがって、これは、まっかな色がルビーのようで、からだの中まですきとおっています。かわいらしい二つの目は、まるでダイヤのようにかがやいています。

「あつ。」

木村くんが、びつくりするような声をたてました。そのとき、むこうのほらあなの中から、なにか黒いものはい出してきたからです。

それは、あなから出ると、すつくとたち上がりました。にんげんです。黒いマントをきた、せいようあくまのような、おそろしい人です。

「わははは……。小林くん、ひさしぶりだなあ。わしをわすれたかね。ほら、いつか『おうごんのとら』のとりつこで、ちえくらべをしたまほうはかせだよ。」

小林くんは、思わずまえにすすみ出ました。

「あつ、それじゃ、あのときの……。」

「わははは……。こんどもきみたちは、まんまとわしのけいりやくにかかったね。」

4

おぼけやしきのちかしつにしのびこんだ小林・木村くんのまえに、黒いマントをきた、せいようあくまのようなおそろしい人があらわれました。

「わしは、いつか、きみたちしようねんたんでいだと、ちえくらべをしたまほうはかせ

だよ。じつは、もう一ど、きみたちのちえをためすために、ここへおびきよせたのだ。

このまえは『おうごんのとら』だったが、こんどは、この赤いカブトムシだ。これはルビーでできている。二つの目は、ダイヤモンドだ。わしのだいじなたからものだよ。これをきみたちにわたすから、このまえのようにちえをしぼって、うまくかくしてごらん。わしは、五日のあいだにそれをさがしだして、ぬすんでみせるよ。ぬすまれたら、このちえくらべは、きみたちのまけなのだ。」

それをきくと、「ああ、あのときのまほうはかせだったのか。」

と、やつとあんしんしましたが、でも、まだわからないことがあります。

「きのう、このせいようかんの外がわを、はしごもないのに、するするとのぼっていったのはおじさんだったの。それから、まどからのぞいていた女の子は、どうしたのです。おじさんがいじめていたのでしょうか。」

「うふふふ……。あれは、きみたちを、ここへおびきよせる手なのだよ。木村くんのいもうとのミドリちゃんたちが見ているのを知っていて、ふしぎなことをやってみせたのだ。あなときは、このうちのやねから、ほそい、じょうぶな糸のなわばしごがさげてあって、それをつたってのぼったのさ。夕がただだから、とおくからは、その糸が見えなかったのだ

よ。

あのとぎの女の子は、にんぎようだよ。ほら、これをごらん。」

まほうはかせは、マントの下にかくしていた、大きなにんぎようを出してみせました。

「でも、きのうの女の子は、かなしそうなさげび声をたてていたというじやありませんか。」

小林くんがききかえすと、はかせはにやにやわらって、よこをむきました。

「きやあ。たすけてえ。」

女の子のおそろしいさげび声がきこえました。ふたりはびっくりして、にんぎようのおを見ましたが、べつに、口がうごいているわけでもありません。「ははは……。ふくわじゆつだよ。わしが、口をうごかさないので、女の子の声をまねたのだ。きのうのさげび声は、これだったのだよ。」

このたねあかしをきいて、ふたりは、すっかりあんしんしました。そして、まほうはかせからルビーのカブトムシをうけると、おばけやしきを出て、小林くんのうちにかえり、おとうさんやおかあさんやミドリちゃんに、そのことを話しました。それから、ふたりで、^{あけち}明智たんでいじむしよへいそぎました。そして、明智先生にも、まほうはかせのことをほ

うこくするのでした。

それからしばらくすると、小林くんがでんわでよびよせた、十人のしょうねんたんでいだんいんが、明智たんでいじむしょへあつまつてきました。その中にひとりだけ、女の子がまじっていました。中学一年の宮田ユウ子ちゃんという、ついこのごろなかま入りをした、たったひとりのしょうじよだんいんです。年のわりにからだが大きく、いかにもかわいい女の子でした。

「あたし、いいこと思いついたわ。そのカブトムシ、あたしのうちへかくすといいわ。」
みんなでそうだんをしているうちに、ユウ子ちゃんが、そんなことをいいだしました。
そして、小林だんちようの耳に口をよせて、なにか、ひそひそとささやくのでした。

つぎつぎとささやくかわして、ユウ子ちゃんの考えがわかると、みんなは手をたたいて、
「それがいい、それがいい。」とさんせいしました。

ユウ子ちゃんは、ルビーのカブトムシをポケットに入れ、その上を手でしっかりおさえて、しょうねんたちにおくられてうちへかえりました。ユウ子ちゃんのうちは、せつこうのおきものを作るのがしょうばいで、うらに、小さなこうばがあるのです。

ユウ子ちゃんは、そのこうばの中へはいっていきました。こうばには、しょうねんのく

びや、ビーナス（めがみ）や、花かごをさげた女の子などのせっこうのおきものが、たくさんならんでいます。

すつかりできあがったものもあり、まだできあがらないで、これからつきあわせるものもあります。ユウ子ちゃんは、このせっこうの中へ、カブトムシをかくそうというのでしようか。

そんなことで、うまくまほうはかせの目をくまますことができますのでしようか。なにか、もつとふかい考えがあるのかもしれない。

ユウ子ちゃんが、せっこうのおきものまん中にしゃがんでいますと、ガラスまどの外に、おそろしいかおがあらわれました。かおじゆうひげにうずまったきたない男が、そつと、中をのぞいているのです。

このひげの男は、いったいなにもなのでしょう。そして、しようねんたちが手をたたいてよろこんだユウ子ちゃんのちえというのは、どんなことだったのでしょうか。

やがて、じつにきみようなことがおこるのです。この、かおじゆうひげにうずまった、えたいの知れない男が、とほうもないことをやりはじめなのです。

5

しようねんたんでいだんのたつたひとりのしようじよだんいん、宮田ユウ子ちゃんは、ルビーでできた赤いカブトムシをもって、じぶんのうちのせつこうぎくのこうばにはいつて、なにかやっていました。すると、そのとき、まどの外から、かおじゆうひげでうずまった、きたない男が、そつとのぞいていたのです。

そのあくる日の夕がた、ユウ子ちゃんのおうちのある渋谷区しげやで、つきつきとふしぎなことがおこりました。ある町のがくぶちやさんへもじやあたまの、きたない男がはいつてきて、シヨーウインドーにかぎつてあつた、五、六さいのかわいいしようねんの、くびだけのせつこうぞうをかっていきました。

男は、みせを出ると、さびしいよこちように、はいり、あたりを見まわしてから、紙づつみをといて、せつこうのしようねんのくびを、いきなりじめんにたたきつけ、こなごなにわつてしまいました。

せつかくかつたせつこうぞうを、なぜわつたのでしょうか。この男は、気でもちがってしまったのでしょうか。

それから、三十分もすると、その男は、べつの町のびじゅつしょうのみせにあらわれました。そして、そこでも、さつきとおなじしよねんのくびのせつこうぞうをかい、また、さびしいよちようへ来ると、こなみじんにわつてしまいました。また、三十分ほどつたころ、こんどは、おなじ渋谷区のあるおやしきへ、あの男がしのびこんでいきました。その家のおうせつまにも、おなじせつこうのしよねんのくびがありました。男は、まどからはいりこんでそのくびをぬすみとると、近くのじんじやの森で、またこなごなにこわしてしまいました。

「だめだ、はいつていない。あのととき、まだつぎあわされていないせつこうは、この三つだけだったのに……。」

男は、とほうにくれたように、たちつくしていました。そのとき、ふいにうしろから、女の子のわらい声がきこえてきました。

男が、びつくりしてふりむくと、大きな木のうしろから出てきたのは、ユウ子ちゃんです。

「おじさん、いっぱいくつたわね。このちえくらべは、しよねんたんでいだんのかちよ。おじさんは、あたしが、せつこうぞうの中へ、赤いカブトムシをかくすのをまどから見

ていたのでしょう。ところが、あれは、かくすように見せかけたただけなのよ。ほんとうは、もつとべつのところにかくしてあるのよ。」

ユウ子ちゃんは、そういつて、さもおもしろそうにわらうのでした。

「そうか、うまくやりやがったな。おれは、あれをぬすもうと思ったが、いつもこうばに人がいたので、ぬすみ出すことができなかった。

しかたがないから、あの三つの子どものくびがはいたつされるのをまっつて、そのさきを一けんずつまわつてこわしてみたが、なんにも出てこなかった。まんまといっぱいくわされたな。わっは、は、は……。」

男は、べつにおこるようすもなく、大わらいをして、それから、ふつとまじめなかおになりました。

「ところがね、おじょうさん。まほうはかせは、もつと上手うわてなんだぜ。おれは、はかせのでしで、きみを、ほうぼうひっぱりまわすやくだったのさ。きみが、おれのあとをつけているまに、まほうはかせが、きみのかくした赤いカブトムシを、ちゃんとぬすみ出してしまったのだよ。は、は、は、は……。」

それをきくと、ユウ子ちゃんは、はつとして、まっさおになってしまいました。

そして、ものもいわず、いきなりどこかへかけだしていくのでした。男は、あとを見お
くつて、にやりとわらいました。

ユウ子ちゃんは、バスにのつておうちへかえると、小さなシャベルをもって、うら口の
外のはらっぱへいそぎました。

ひざまでかくれる草をかきわけて、はらっぱのまん中まで行くと、目じるしの石をとり
のけて、その下をシャベルでほりかえし、かくしておいたブリキカンをとり出しました。

「まあ、よかった。あの人、うそをついたのだね。」

かんの中には、赤いカブトムシが、ちゃんとはいつていたではありませんか。

「うふ、ふ、ふ。こんどは、きみのほうでいっばいくったね。」

とつぜんうしろから声がして、さっきの男がたっていました。

「まほうはかせが、ぬすみ出したというのはうそさ。まほうはかせは、このわしだよ。あ
んなことをいって、きみを、ほんどのかくしぼしよに來させたのさ。さあ、そのカブトム
シを出しなさい。」

男は、にゅつと手をつき出しました。

6

ユウ子ちゃんは、まほうはかせにうまくだまされて、赤いカブトムシのかくしぼしよを見つけられてしまいました。

そこは、さびしい原っぱですし、あい手はおとなのまほうはかせ。こちらは、小さい子どもですから、どうすることもできません。とうとう、ルビーのカブトムシを、とりあげられてしまいました。

「さあ、こんどは、きみたちがさがす番だよ。わしが、このカブトムシを、ふしぎなばしよへかくすからね。うまく見つけ出してごらん。」

は、は、は、は……。かわいそうに、なきべそをかいているね。よしよし、それじゃ、かくしぼしよのひみつを、きつと、きみにおしえてあげるよ。まっているがいい。」

まほうはかせは、そういつて、どこかへたちきつてしまいました。

それから三日めの、おひるすぎのことです。ユウ子ちゃんが、うちのにわであそんでいますと、赤いゴムふうせんが、空からふわふわとおちてきました。

どこかの子どもが、ふうせんの糸をはなして、空へとび上がったのが、力が弱くなって

おちてきたのでしよう。

ユウ子ちゃんがそう思つて、赤いふうせんをじつと見ていますと、やがてそれは、すぐ目の前のじめんにおちました。

ふうせんには糸がついていて、その糸のはしに、白いものがくくりつけてあります。ユウ子ちゃんは、なんだろうと思つて、それをひろつてしらべてみました。

それは、紙をこまかくおりたんだものでした。ていねいにのばしてみると、その紙には、こんなへんなことが書いてあります。

五月二十五日午後三時二十分、一本スギのてっぺんからはいれ。おそろしい番人に注意せよ。

まほうはかせ

「あらっ、まほうはかせからの手紙だわ。」

ユウ子ちゃんは、むねがどきどきしてきました。

まほうはかせは、このあいだのやくそくをまもって、ユウ子ちゃんに、カブトムシのかくしばしよをおしえてくれたのかもしれない。

ユウ子ちゃんは、すぐにその紙をもつて、電車に乗ってこうじまち麴町の明智たんていじむしよをたずね、小林しょうねんにそうだんしました。

「五月二十五日といえば、あさつてだね。あさつて、一本スギのところへ行けばいいんだね。一本スギつて、なんだか聞いたことがあるよ。あつ、そうだ。木村敏夫くんの家のそばの、まほうはかせのばけものやしきのむこうに、たしか、一本スギつてというのがあった。木村さんに、でんわで聞いてみよう。」

でんわをかけますと、やつぱりそこに、一本スギという、高いスギの木があることがわかりました。

そして、五月二十五日午後三時に、小林くんたち五人のだんいんが、一本スギのある原

つばへやつて来ました。

五人というのは、小林だんちようとユウ子ちゃんと、木村敏夫さんと、それから、だんいんの中でいちばん力の強い井上いのうえいちろう一郎くんと、野呂のろいつべい一平くんでした。一平くんは、ノロちゃんというあだ名で、おくびようものだけれども、すばしこくて、よく氣のつく子でした。

「一本スギのてっぺんからはいれつて、どういいうみだろう。」

小林くんがくびをかしげていますと、ノロちゃんが、とんきような声で、

「きつと、てっぺんにあながあいているんだよ。そこからはいるんだよ。ぼく、のぼつてみようか。」

といつて、こしにまきつけていた長いなわをほどき始めました。

ノロちゃんは、木のぼりのめいじんで、きようは、スギの木にのぼらなければならぬだろうと思つて、そのよよいをしてきたのです。

ノロちゃんは、なげなわもじようずでした。その長いなわを、くるくるとまわして、ぱつとスギの木の高いえだになげかけました。そして、一方のはしを、自分のからだにしぱりつけ、一方のはしを、みんなにひっぱつてもらうのです。

つなひきみたいに、みんながなわをひつぱると、ノロちゃんはそれを力にして、ふといスギのみきを、するするとのぼっていききました。

そして、下のえだまでのぼりつけば、あとは、えだからえだへとつたっていけばいいのです。

ノロちゃんは、とうとう、スギの木のてっぺんまでたどりつきました。

そして、しばらくそのへんをさがしていましたが、

「なんにもないよう。あななんて、どこにもあいていないよう。」

とさけぶ声が、はるかにきこえました。これは、どうしたわけでしょう。

「てっぺんからはいれ。」といったって、あながなければ、はいれないではありませんか。ノロちゃんは、五分ほど木のとっぺんで、じっとしていましたが、やがて、なにを思ったのか、とんきような声で、

「わかったよう。あれだよ、あれをごらん。」

とさけんで、原っぱの一方をゆびさしてみせるのでした。そこには、たいよの光をうけて、一本スギのかげが、長々とよこたわっていました。

みなさん、ノロちゃんは、いったいなにに気づいたのでしょうか。

こんどは、少年たんていだんが、ルビーのカブトムシをさがす番ばんでした。

五月二十五日午後三時二十分、一本スギのてっぺんからはいれ。おそろしい番人に注意せよ。

という手紙のとおり、小林だんちようとユウ子ちゃんと、木村さんと井上さんと、ノロちゃんの五人が、世田谷区の本スギの原っぱへやって来ました。

木のぼりのめいじんのノロちゃんが、高いスギの木のてっぺんへのぼりましたが、はい

るあななんて、どこにもありません。ノロちゃんは、しばらく、あたりを見まわしていましたが、なにを思ったのか、原っぱに長くよこたわっているスギの木のかげをゆびさしながら、さけびました。

「あそこだよ。あそこに、入口があるんだよ。」

それを聞くと、小林だんちようも、はつとそこへ気がつきました。

「ああ、そうだ。てっぺんというのは、スギの木のてっぺんのかげのところなんだ。」

ノロちゃんが木からおりのをまっつて、みんなで、スギの木のかげのさきつぽまで行ってみました。

そのへんには、たけの高い草がしげつています。小林くんは、この草の中へふみこんでいつてさがしていましたが、やがて、

「あつ、ここにほらあながある。ここが、入口にちがいないよ。」

と、みんなをよびあつめました。それは、さしわたし六十センチぐらいのせまいあなでした。

中はまっくらですから、井上くと木村くんが、よういのかいちゆうでんとうをつけ、井上くんがさきになつて、あなの中へはいこんでいきました。

せまいところは三メートルほどで終り、にわかにながひろくなって、下の方へ、石だんがついています。もうたつて歩けるのです。

石だんをおりると、しようめんに、大きな鉄のとびらがしまっています。まほうはかせの手紙には、「おそろしい番人に注意せよ。」と書いてありました。きつと、そのおそろしいやつが、とびらのむこうにまちかまえているのだらうと思うと、みんな、むねがどきどきしてきました。

でも、ここまで来て、ひきかえすわけにはいきません。

井上くんは、とびらのとつてをつかんでおしてみました。

すると、かぎもかけてないらしく、鉄のとびらは、キイツとぶきみな音をたてて、むこうへひらきました。

かいちゆうでんとうで、その中をてらしてみましたが、なんにもありません。ただ、まつくらなほらあなが、ずっとおくの方へつづいているばかりです。

五人は、井上くんをさきにたてて、おずおずとそのくらやみの中へはいつていきました。おくびようもののノロちゃん、ぶるぶるふるえながら、小林だんちようについていきました。それに、ユウ子ちゃんは、女の子ですから、まもってやらなければなりません。

小林くんは、両手で、ノロちゃんユウ子ちゃんの手をひいて、すすんでいきます。すこし行くと、ほらあなのまがりかどへ来ました。

そこをひよいとまがると、みんなは「あつ。」といったまま、たちすくんでしまいました。すぐ目の前に、とほうもなく大きなばけものがうずくまっていたからです。そのかはきいろで、まっ黒なふといしまがついていました。せんめんきほどの大きな目が、やみの中で光っていました。

ステッキをたばにしたような、ふといひげのはえた大きな口、その口から二本の白いきばが、にゅつとつき出ています。トラを百ばいも大きくしたようなばけものです。そのおそろしいおが、ほらあないつぱいになって、あごが、じめんについているのです。

どこからか、なまぐさい、強い風がふきつけてきました。

「うへへへ……。かわいい子どもたちが来たな。おいしそうなごちそうだ。いま、たべてやるからな。うへへへ……。」

おぼけのトラが、そんなことをいって、ぶきみにわらいました。その声が、ほらあなにこだまして、なんともいえないおそろしさです。

そして、おぼけは、二メートルもあるような大きな口をがっぴらきました。

五人は、にげようとしても、じしやくでひきつけられたように、どうしてもにげることができません。そして、いつのまにか、おばけのトラの口の前まですいよせられ、つぎつぎと、口の中へのまれてしまいました。

口の中には、まっかな大きなしたがつうごめいていました。

五人は、そのしたのところがたまま、気をうしなったようになっていました。

それにしても、地のそこに、どうしてこんな大きなけものがすんでいるのでしょうか。ばけものにたべられた子どもたちは、これから、いったいどうなるのでしょうか。

8

小林さんと木村さんと、ユウ子ちゃんと井上さんと、ノロちゃんの五人は、ルビーのカブトムシをとりかえすために、世田谷区のさびしい原っぱの、ふしぎなほらあなへはいっていきました。

そのほらあなの中には、ふつうのトラの百ばいもある、おばけのトラがねそべっていて、大きな口へ、五人をのみこんでしまいました。

しばらくして気がついてみると、まだ、トラのしたの上どころがったままで、いぶくろの方へのみこまれていくようすもありません。井上くんは、しっかりとぎりしめていたかいちゆうでんとうで、おぼけののどのおくをてらしてみました。

すると、このトラののどのおくには、しよくどうも、いぶくろも、なにもないことがわかりました。

くびだけのトラだったのです。もちろん、いきたトラではなくて、きかいじかけの作り物です。すいよせられたと思つたのは、どこかうしろの方から、大きなせんぷうきのようなもので、ふきつけられたのでしよう。

井上くんは、トラの口から外へ出ようと思いました、もう口はとじられていて、どうしてもあけることができません。

しかたがないので、小林くんとそうだんして、おくの方へ行ってみることにしました。トラののどのおくは、いままでとおなじコンクリートのほらあなです。かいちゆうでんとうでてらしながら、そこをすすんでいきますと、ぼったり行きどまりになってしまいました。

「あつ、ここにドアがあるよ。」

ひとりが、やつとおれるほどの小さいドアです。井上くんが、そのドアのどっ手をつかんでひっぱると、なんなくあきました。まるで、きんこのどびらのように、ひどくぶあつい、がんじょうな鉄のドアです。

五人は、その中へはいりました。すると、ふしぎなことに、そのおもいドアが、すうつと、ひとりでにしまつてしまつたではありませんか。

井上くんはおどろいて、もう一どあけようとしたが、こんどは、いくらおしてもびくともしません。それにドアのうちがわには、どっ手もなにもなく、すべすべした鉄のいたです。

「おやつ。ここは、どこにも出口のないまるいへやだよ。」

それは、たたみ二じょうくらいの、いどのそのようなまるいへやでした。

五人は、コンクリートのつつの中にとじこめられてしまつたのです。かいちゆうでんとうでてんじょうをてらしてみると、まるいつつは、ずっと上の方へつづいています。まったくいどのそのとおなじです。

「おや、あの音はなんだろう。」ノロちゃんが、おびえた声を出しました。

ほんとうに、へんな音がしています。とおくで、モーターがまわっているような音です。

そのとき、かいちゆうでんとうでてんじようをてらしていた井上くんが、

「あつ、たいへんだつ。」

とさけんだので、みんなびつくりして、その方を見上げました。

じつにおそろしいことが、おこっていたのです。ごらんなさい。てんじようから、鉄のふたのようなものが、じりじりとおりてくるではありませんか。

まるいつつのうちがわへ、ぴったりはまったあつい鉄のふたです。それが、しずかにおりてくるのです。

鉄のふたは、モーターの力で、すこしのくるいもなくおりてきます。ああ、もう手をのばせばとどくところまでおりてきました。

「みんな、手をのぼして、力をあわせて、あれをささえるんだ。でないと、ぼくたち、おしつぶされてしまうよ。」

小林くんはそういつて、まず、自分が両手を上げました。

みんなも、そのまねをして、両手を上げて、鉄のふたをおしもどそうとしました。しかし、それは、ひじようにおもい鉄のかたまりらしく、五人の力では、とてもささえきれません。じりじり、じりじりと、おりてくるのです。それにつれて、ささええている手が、だ

んだんさがり、とうとう鉄のふたは、みんなのあたまにくつつくほどになりました。

もう、しやがむほかはありません。そのつぎには、すわってしまいました。それでもまだ、鉄のふたはおりてくるのです。もう、すわっていることもできないようになり、みんなはあおむけにねころんで、両手と両足でささえようとしましたが、やっぱりだめです。なん百キロというおもさの鉄が、ねているかおのすぐそばまでおりてきました。

ユウ子ちゃんは、なきだしました。ノロちゃんもなきだしました。

「たすけてくれえ……。」

井上くと木村くんが、かなしい声でさげびました。小林くんさえ、なきだしたくなるほどでした。

ああ、五人は、いったいどうなるのでしょう。

9

少年たんでいだんの小林だんちようと、だんいんの木村くと、ユウ子ちゃんと、井上くと、ノロちゃんの五人が、まほうはかせのあんごうをといて、世田谷区のはずれのさ

びしい原っぱにあるほらあなへはいっていくと、コンクリートのまるいへやにとじこめられ、上からおもい鉄のふたが、じりじりとさがってきました。鉄のふたにはすきまがないから、そのままさがってききたいへんです。

みんな、おしつぶされてしまふにきまつているのです。おくびようもののノロちゃんや、女の子のユウ子ちゃんは、わあわあとなきだしてしまいました。

しかし、だんちようの小林くんは、しっかりしていました。いそがしくあたまをはたらかせて、どうしたらみんながたすかるかということをし、いっしょうけんめいに考えました。「まほうはかせは、人ごろしなんかするはずがない。こんなおそろしい目にあわせて、ぼくたちのゆうきとちえをためているんだ。」

それなら、ちえをはたらかせたら、どこかににげ道があるのかもしれない。

そこで小林くんは、かいちゆうでんとうをもったまま、まるいへやのまわりを、ぐるっとはいまわり、コンクリートのかべをしらべてみました。

すると、コンクリートのかべに、六十センチ四方ほどの、四かくな切れ目がついているのを見つけました。

「これが、ひみつのかくし戸かもしれないぞっ。」

力いっぱいおしてみました、びくともしません。

「どこかに、これをひらくしかけがあるにちがいない。」

小林くんはすばやく、そのへんを見まわしました。

四かくな切れ目から、すこしはなれたかべの上の方に、コンクリートが小さくふくらんだところがあります。よくしらべてみると、そのぼつちは、コンクリート色にぬった金かなも物ものであることがわかりました。

「ああ、そうだ。鉄のふたが下までおりたら、ぼくたちがしんでしまうから、下までおらないうちに、にげ出せるしかけになっているのだ。」

「鉄のふたが、このぼつちのところをとおると、ぼつちがおされる。そうすると、ひみつの戸が外へひらくようになっていなのだ。」

小林くんは、とつさに、そこへ気がつきました。

「それなら、手でおしたって、ひらくかもしれないぞ。」

そこで、ぼつちにおやゆびをあて、その上に、もう一方の手をかさねて、力いっぱいおしてみました。

ぼつちは、なかなか動きません。たいへんな力があるのです。小林くんは、からだじゆ

う、あせびつしよりになりました。でも、がまんをして、うんうんおしつづけていますと、カタンという音がして、四かくな切れ目が、すうつとむこうへひらきました。小林くんのちえとゆうきが、せいこうしたのです。

そこは、にんげんひとりがやつとはつてとおれるほどのまつくらなあなでした。小林くんは、みんなをよんで、そのあなへはいこみました。きみがわるいけれども、じつとしていたら、鉄のふたにおしつぶされてしまうだけです。このあなへにげるほかはないのです。

そのまつくらできゆうくつなあなは、十メートルもつづいていました。

やがて、あたりがきゆうにひろくなりました。外へ出たのでしょうか。いや、そうではありません。まだまつくらです。やはり、地のその一室なのです。

たち上がって、かいちゆうでんとうでてらしてみますと、それは、二十じようもあるよ
うな、コンクリートのへやでした。みんなが、そのへやにはいったとき、どこからか、ぎ
よつとするような声がひびいてきました。

「わははは……。かんしん、かんしん。とうとう、あぶないところをぬけ出したね。だが、
まだこれでおしまいじゃないよ。わしの手紙には、『おそろしい番人に注意せよ。』と書

いてあった。だい一は大トラ、だい二は鉄のふた、さて、だい三の番人はなんだろうね。おしまいほどおそろしいやつがひかえているからね。ようじんするがいいよ。」

まほうはかせの声です。どこから聞えてくるのかわかりません。きつとてんじょうのすみに、ラウドスピーカーでもしかけてあるのでしょうか。

五人は一かたまりになって、おたがいのからだをだきあつてじつとしていました。ノロちゃんのからだだが、がたがたふるえているのがよくわかります。

「あれっ、なんだろう。なにか動いているよ。」

木村くんが、むこうのゆかをゆびさしてさげびました。かいちゆうでんとうの光が、さつとその方をてらします。

するとそこに、なんだかきみのわるいことがおこっていました。

地のそこから、みょうなものがむくむくとあらわれてきたのです。

まるいあたまのようなものが出てきました。

それが、見る見る大きくくなります。あなもなにもないコンクリートのゆかから、むくむくと上がってくるのです。子どもくらいの大きさになりました。おとなくらいになりました。おとなのばいになりました。おとなの三ばいになりました。大きなあたまの、まつさ

おなかからだの、のつぺらぼうなかいぶつです。それが、きりもなく大きくなっていくのです。

10

小林くんと、木村くんと、ユウ子ちゃんと、井上くんと、ノ口ちゃんの五人は、ルビーのカブトムシをとりかえすために、まほうはかせのすみかのちか室へはいつていつて、いろいろなおそろしいめにあいました。ちか室には広いへやがあつて、五人がそこへはいると、へやのまん中に、むくむくとみょうなかいぶつがあらわれました。

たまごに目と口をつけたような、おかしなやつです。それが、見るまにだんだん大きくなり、おとなの三ばいもあるような大にゆうどうになってしまいました。そして、

「わははははは……。」

と、かみなりのようなわらい声が聞えました。

みんなは、思わずもと来た方へにげだしましたが、せまい入口にはいこもうとして、ふと、うしろを見ますと、おやつ、あのかいぶつは、どこへ行ったのか、かげも形もなくな

っていました。かいちゆうでんとうでよくしらべてみましたが、へやは、まったくからっぽで、なにもないのです。

四方のかべはかたいコンクリートで、どこにも出口はありません。

みんなは、いよいよきみがわるくなってきました。

「へんだなあ。あいつ、けむりのようにきえてしまったよ。」

ノロちゃんが、とんきような声でいいました。

「あつ、ごらん。なんだか、動いてる。」

またしても、じめんから、ぶきみなものがわき出してきました。まっさおなものです。

それが、かおからかた・はら・こしとせり出して、おとなぐらいの大きさになりました。

「あつ、せいどうのまじんだ。」

小林くんがさげびました。ずっと前に、少年たんでいだんがたたかた、あのおそろしい、せいどうのまじんと、そつくりなのです。

せいどうでできたような、青いやつです。耳までさけた口で、にやにやわらっています。それが見る見る大きくなって、やっぱりおとなの三ばいほどになりました。あたまがてんじょうにつかえています。

「ギリリリリ、ギリリリリ……。」

はぐるまの音がします。せいどうのまじんの中に、はぐるまがしかけてあるのでしょうか。

「わははは……。ちんぴらども、よく来たな。きみたちのさがしていた赤いカブトムシは、このわしが持っている。ほら、ここにあるよ。」

まつさおなきよじんは、おそろしい声でそういうと、耳までさけた口をぱっくりあけました。

三日月がたの、まつ黒なほらあなのような口です。

その口から、ペロペロと赤いしたを出しました。そのしたの上に、まつかなカブトムシが乗っているではありませんか。

せいどうのまじんは、口の中に、ルビーのカブトムシをかくしていたのです。少年たちはそれを見ると、思わず、「あつ。」とさげびました。しかし、あい手はおそろしいかいぶつです。とりかえすことは、とてもできそうにありません。

「わははは……。これがほしくないのかね。おくびょうなちんぴらどもだな。くやしかったら、わしのかおまでのぼってきてみる。そして、わしの口の中から、これをとり出せば

いいのだ。わはははは……。そのゆうきが、きみたちにあるかね。」

せいどうのまじんは、少年たちをばかにしたように、大きなからだをゆすつてわらうのでした。

「ちくしよう。みんな来たまえ。」

おとうさんから、けんどうをならっている、井上一郎くんはそうさげぶと、いきなり、かいぶつの右の足にしがみついていきました。

あいては、おとなの三ばいもあるきよじんです。まるでこれは、すもうとりの足に赤んぼうがしがみついているようです。

そのとき、ガラガラガラツという、おそろしい音がして、あたりが、ぽつと明るくなりました。やみになれたみんなの目には、まぶしくて、目をあけていられないほどの明るさです。

いったい、なにごとが起つたのでしょうか。やつと目を開いてみますと、ふしぎふしぎ、ちか室のてんじようがなくなっているではありませんか。

てんじようがきかいじかけで、両方へ開くようになっています。上には、青空が見えています。たいようの光が、さんさんとあたりにかがやいています。

「あつ、たいへんだ。井上くんが……。」

小林くんが、びっくりしてさげびました。ほんとうに、たいへんなことが起っていたのです。

「ごらんさい。せいどうのまじんのからだだが、すうつとちゆうにういたかと思うと、そのまま、ふわふわ空へまい上がっています。足にしがみついた井上くんも、いっしょにつれたままです。」

これも、まほうはかせのまほうでしょうか。

それにしても、これから、いったいどんなことが起るのでしょうか。

二

ちか室のてんじょうが大きく開いて、おとなの三ばいもあるせいどうのまじんが、ふわとちゆうにうき、そのまま空の方へまい上がっていききました。

まじんの足にしがみついていた井上一郎くんも、いっしょに、空へまい上がっていくのです。

「おうい、井上君、手をはなせよ。そして、下へとびおりるんだっ。」
下から、小林くんが、大声でさけびました。

まじんの足は、ちか室のゆかから、もう三メートルもうき上がっていましたが、井上くんは思い切つて手をはなし、ぱつととびおりました。

そして、コンクリートのゆかにしりもちをついて、かおをしかめています。

「あいつ、赤いカブトムシを口に入れたまま、とんでいってしまったよ。早く追っかけなけりやあ。」

「よしっ。なわばしごだっ。」

小林くんはそうさけぶと、おなかのシャツの下にまきつけていた、じょうぶなきぬひものなわばしごをするするとほどいて、その一方のはしについている鉄のかぎを、開いたてんじょうへ投げ上げました。

なん度もしくじつたあとで、やっとそのかぎが、てんじょうのあなのふちにひつかかったのです。

しようねんたんでいだんのなわばしごは、一本のきぬひもです。それに三十センチごとに大きなむすび玉がついていて、そこへ足のゆびをかけてのぼるのです。

「じゃあ、ぼくがさきにのぼるから、みんな、あとから来るんだよ。」

小林くんはそういって、きぬひものなわばしごをぐんぐんのぼっていくのでした。

そのあとから、みんなのぼりました。ユウ子ちゃんやんは女の子ですから、井上くんたちが上から手をのぼして、引き上げてあげました。

あなの外へ出ると、そこは、草ぼうぼうの原っぱでした。さいしよにのぼった小林くんが、むこうへ走っていくすがたが小さく見えます。いったい、どこへ行こうとするのでしょうか。

空を見上げると、せいどうのまじんは、ふうせんのように、高く高くとんでいきます。

「わあ、よくとぶねえ。もう、あんなに小さくなっちゃった。」

ノロちゃんがさげびました。

あとでわかったのですが、せいどうのまじんはあついビニールできていて、中にかるいガスを入れたものでした。つまり、ふうせんだったのです。

ちか室のゆかに小さなあながあいていて、その下に、また、小ベヤがあつたのです。そこにまほうはかせがかくれていて、あなからビニールのまじんをゆかの上におし出しながら、ポンプでガスをふきこんだのです。

ガスがはいるにしたがって、ビニールのまじんはふくれあがり、しまいには、おとなの三ばいもあるきよじんになってしまったのでした。

せいどうのまじんがものをいったのは、ゆかのあなの下から、まほうはかせが、声をかえてしゃべっていたのです。

まじんが口を開いたのは、あごに細い糸がついていて、それを下からひっぱると口があき、糸をはなすと、口がしまるようになっていたのです。赤いカブトムシは、したにくくりつけてあったのでしよう。

まじんが出る前にあらわれた、たまごのおばけみたいなものも、やっぱりビニールでできていて、一度ガスをを入れてふくらまし、みんながにげ出している間に、きゆうにそのガスをぬいたので、ビニールはぺちゃんこになり、ゆかのあなの下へかくれてしまったのです。

ちか室が暗いので、小林くんたちは、その小さなあなのしかけがよく見えなかったのです。

空のせいどうのまじんは、だんだんすがたを小さくしながら、東の方へとんでいきます。東の方へ風がふいているのでしよう。まじんは、赤いカブトムシを口に入れたまま、その

風に送られて、どことも知れずとびさつていきます。

「あつ、もう、見えなくなつてしまった。」

木村くんがさけびました。

そのとき、原っぱのむこうから、小林くんがかけもどつてくるのが見えました。

「小林さあん、どこへ行つたの。あいつは、赤いカブトムシを口に入れたまま空へのぼつて、もう、見えなくなつてしまったよ。」

井上くんがよびかけますと、みんなのそばへかけよつてきた小林くんが、いきをはずませて答えました。

「明智先生に、でんわをかけたんだよ。」

明智先生に、せいどうのまじんのことを知らせたらね、先生は、すぐに新聞社へでんわしてから、自動車で、あるところへとんでいってくださいったんだよ。そして、いまにむこうの空から、みかたがとんでくるんだよ。」

小林くんが、東京の町の方の空をゆびさしました。いったい、空からなにがやって来るのでしょうか。

三十分あまりも待ったでしょうか。もう夕ぐれ近いむこうの空に、ぽつんと、黒いてん

のようなものがあらわれました。

「あつ、来た、来た。あれだよ。」

小林くんがうれしそうにいました。

てんのようなものは、だんだん大きくなって、こちらへ近づいてきます。それは、一台のヘリコプターでした。みなさん、しょうねんたんていだんのみかたというのは、このヘリコプターだったのです。

12

しょうねんたんていだんのおうえんにやって来たヘリコプターは、強い風をまき起しながら、原っぱのまん中へちやくりくしました。

「あつ、明智先生だつ。」

小林だんちようがさげんで、その方へかけ出しました。

ヘリコプターの、すきとおったそうじゅう室のとびらが開いて、明智たんていがおりてきました。

めいたんていは、ひこうきでもヘリコプターでも、そうじゅうできるのです。

明智たんていは、小林くんのでんわをきくと、いそいで新聞社とうちあわせ、新聞社のヘリコプターを、自分でそうじゅうして、とんできたのです。

みんなは明智たんていのまわりをとりかこんで、ちか室でおそろしいめにあつたことを、口々に話すのでした。

「よし、それじゃあ、このヘリコプターで、せいどうのまじんを追いかけるんだ。」
明智たんていは、みんなにさしずをしました。

「小林くんと井上くんとふたりだけ、ぼくといつしよに乗りたまえ。それいじようは乗れない。のこった人は、みんなうちへ帰って、待っていたまえ。きつと、せいどうのまじんをとらえてみせるよ。そして、赤いカブトムシをとりかえしてあげるよ。」

明智たんていと、小林くん・井上くんのふたりがヘリコプターに乗りこみました。
ヘリコプターはまた、おそろしい風を起して、とび上がっていきます。原っぱにのこつたノロちゃんと木村くんと、ユウ子ちゃんは、手をふつて、それを見送りました。

小林くんと井上くんは、はじめてヘリコプターに乗ったのです。うちゅうりょこうにでも出かけるような気持でした。

ヘリコプターは、高い空を、せいどうのまじんがとびさった東の方へ進んでいきます。ふりむくと西の空は、まっかな夕やけでした。やがて、日がくれるのです。そのときのよいに、そうじゆう室には、小がたのサーチライトがそなえつけてあります。

せいどうのまじんは、風にはこぼれていったのですから、風のふく方へ追いかければよいのです。こちらには風のほかに、プロペラの力があります。きつと、追いつくことができます。

やがて、夕やけもきえ、見る見るあたりが暗くなってきました。空にはいちめんに、星がまたたき始めました。ちじようには、いなかの町のでんとうが、これも星のように、ちらほら見えています。上にも星、下にも星、ほんとうにうちゅうりょこうです。

「あつ、先生。あそこに、なんだかとんでいますよ。」

小林くんのさけび声に、ぱつとサーチライトがてんじられました。その光のとどかないほどむこうの空に、なんだか黒っぽいものがふわふわとただよっています。ヘリコプターは、その方へしんろをむけました。

「あつ、やっぱりそうだ。にんげんの形をしている。せいどうのまじんですよ。」

やがてそれが、サーチライトの光の中へはいつてきました。たしかに、せいどうのまじ

んのふうせんです。

「小林くん、これで、あいつのからだをうつんだ。いまに、あいつのすぐよこを通るからね。そのとき、ドアをすこしあけて、右手を出して、うつんだ。」

明智たんていはそういつて、小林くんにピストルをわたしました。小林くんはたんていじよしゆですから、ピストルのうちかたは知っています。

明智たんていは、ヘリコプターをうまくそうじゆうして、せいどうのまじんのすぐよこに近づき、そくどをおとしてならんでとぶようにしました。小林くんはいわれたとおり、ドアのすきまから手を出して、まじんのからだにピストルをはっしやしました。

すぐ目の前をふわふわとんでいたまじんが、ぐらつとゆれました。ピストルのたまがめいちゆうしたのです。つづいて、二はつ、三はつ……。

そのたびに、まじんのふうせんは、ぐらつぐらつとゆれるのです。そして、たまのあなから、シューツと、ガスがぬけていくのです。

「よしつ。それでいい。こんどはヘリコプターで、あいつをおさえつけるんだ。」

明智たんていは、ヘリコプターをまじんの前にもっていつて、そのままぐつとこうどをさげました。

すると、それにおされて、まじんはよこたおしになり、ヘリコプターのそこにびったりくっついてしまいました。

「よしつ。このままで、どこかの原っぱへちやくりくしよう。もう、にがしっこないよ。」
サーチライトを下へむけると、手ごろなばしよを見つけ、たんていはぐんぐんヘリコプターをさげました。そして、まつ暗な畑の中へちやくりくしたのです。

三人は、ヘリコプターからとび出しました。そして、かいちゆうでんとうをてらして、きたいの下をのぞきました。ビニールのまじんのふうせんは、ガスがぬけ、ぺっちゃんこになって、そこにひっかかっています。

ひきずり出して口の中をしらべますと、したの上に、赤いルビーのカブトムシが、ちゃんとくっついていたではありませんか。とうとうとりもどすことができましたのです。

あくる日、明智たんでいじむしよの小林くんのところへ、でんわがかかってきました。まほうはかせからでした。

「きみたちの勝ちだよ。ルビーは、きみたちのものだ。いろいろ苦しめてすまなかつたね。だが、あれは、きみたちのちえとゆうきをためすためだったのだよ……。しようねんたんでいだん、おめでとう。明智先生によろしく。」

小林くんはじゆわきをおくと、よこにたつて聞いていた明智先生とかおを見あわせて、
にっこりわらうのでした。

青空文庫情報

底本：「新宝島」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年11月8日第1版発行

初出：「たのしい三年生」講談社

1958（昭和33）年4月～1959（昭和34）年3月

入力：sogo

校正：岡村和彦

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤いカブトムシ

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>